

ベトナム・ビレット SG は 23 年まで延長

目 次

はじめに -----	1
1. 19 年の日本のスクラップ輸出	
(1) 輸出量全体 -----	1
(2) ベトナムと韓国向け税関地域別輸出と課題 -----	1
2. ベトナム	
(1) 鉄スクラップ輸入量 -----	2
(2) 輸入ソース -----	2
(3) ビレット輸入とセーフガード -----	3
3. 東南アジア地域のビレット需給	
(1) ベトナム鉄鋼業とビレット需給 -----	3
(2) 東南アジア地区への中国メーカー進出 -----	4
4. まとめに代えて -----	5

2020 年 4 月 22 日（水）

(株)鉄リサイクリング・リサーチ

代表取締役 林 誠一

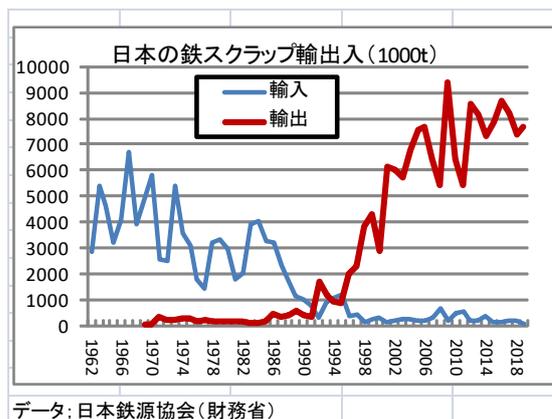
はじめに

2019年の鉄スクラップ輸出は、「雑品」輸入禁止により中国向けが大きく落ち込むなか、ベトナムが第二市場の位置を明確化した。ベトナムでは16年3月に始まったビレット輸入セーフガードは20年3月に設定期限を迎えたが、23年3月まで延伸されることが決まった。一方、国内では二つの高炉メーカーがビレット供給に加わっている。また、中国は過剰設備対策から逃れて、東南アジアへ進出する高炉メーカーがいくつか具体化してきており、今後の東南アジア地区ビレット需給に影響が懸念される。

1. 2019年の日本の鉄スクラップ輸出

(1) 輸出量全体

19年の鉄スクラップ輸出量は766万tとなり前年を約26万t上回った。18年末中国が「雑品」輸入を禁止したため、それまで続いていた160万t~200万tの雑品分が無くなり、600万t~650万t台に落ち込むのではないかと見込んでいたが、台湾が復活し、ベトナム、バングラディッシュ、マレーシア、インドネシア等が増加した。



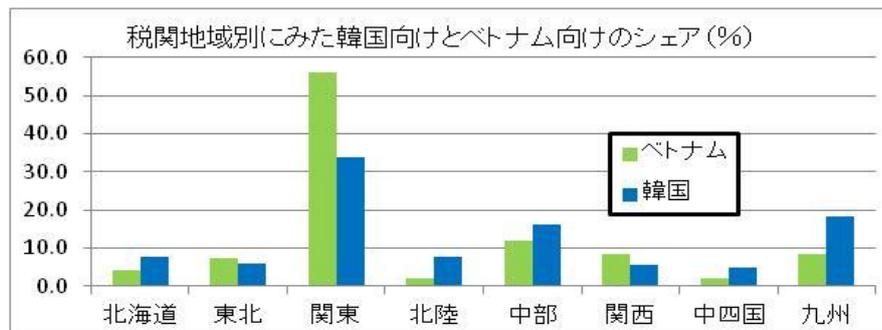
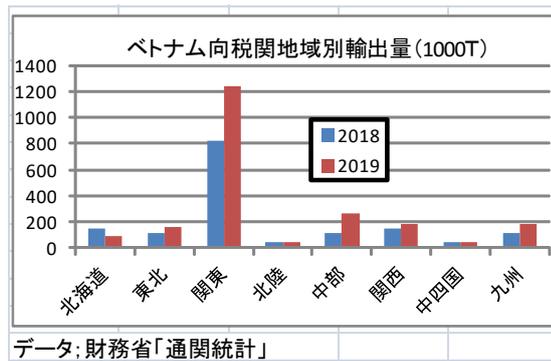
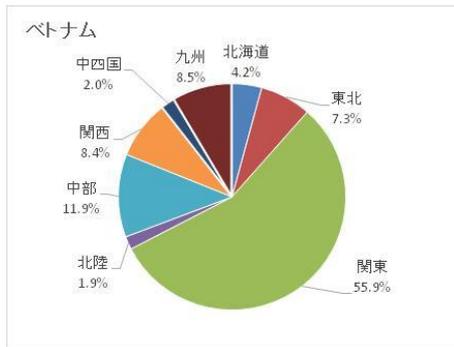
	向先別輸出量										単位1000t、%	
	韓国	中国	台湾	ベトナム	インドネシア	タイ	マレーシア	バングラ	インド	その他	Total	
2018	4,066	1,063	447	1,566	62	55	26	83	24	10	7,402	
2019	3,931	43	654	2,207	157	68	210	318	49	20	7,657	
増減	-135	-1,020	207	641	95	13	184	235	25	10	255	
構成比	51.3	0.6	8.5	28.8	2.1	0.9	2.7	4.2	0.6	0.3	100.0	
備考: 構成比は2019年												

特にベトナム向けシェアは30%となり、韓国に次ぐ位置を明確にした。日本のスクラップ輸出はこの2カ国で80%を依存する寡占状態となっている。しかし1位韓国向けは年間400万t台で踏みとどまったが、5年後には自給化が見えており、決して安閑となれる状態ではない。ベトナムへのさらなる増大や他地域へのマーケット開発が急がれるが、20年2月のベトナム向け輸出量は、初めて韓国を抜いて1位となり月間35万tを記録した。

(2) ベトナムと韓国向け税関地域別輸出量と課題

19年のベトナム向け税関地域別は、関東が56%を占めて最大であり、次いで中部12%、九州8.5%、関西8.4%、東北7.3%等である。前年と比べると、北海道、北陸が減少し、中部、九州、関東が増加した。一方、韓国向けを税関地域別にみると、関東の割合はベトナムに比べると33%と低く、代わって他地域の割合が高い。特に北海道、北陸、中部、中四国、九州で高くなっている。

今後、韓国向けが減少するなかで、韓国に依存が高い前述の地域は、早急にベトナム等東南アジア、西アジア等の遠隔地に対応したインフラや集荷体制が必要となるだろう。



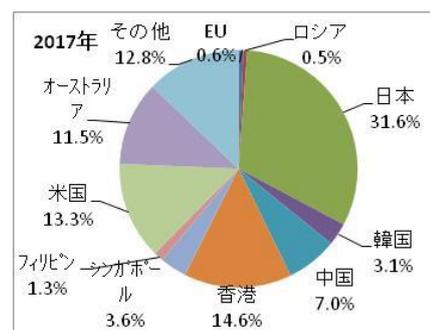
2. ベトナム

(1) 鉄スクラップ輸入量

輸入量は15年の320万tからほぼ倍増しているが、2019年の輸入量は567万tとなり、前年とほぼ同量となった。うち日本ソースは220万t、シェアは39.0%である。日本シェアは15年、16年の49%から17年31.5%、18年28%まで落ちた後、19年は39%に回復するなど変動がある。ただし、弊レポート N051 4頁で述べたように、国境を接する中国、ラオス、カンボジアからの非通関輸入が存在していた時期があり、実際輸入量は全体需給バランスから判断して50万t程度多いと推察され（現地情報）過去のシェア値は変わる。18年以降は政府の取り締り強化に加え、「地条鋼」廃止による中古誘導炉のラオス、カンボジャへの移転により、同国内の鉄源需給改善が起きているとも考えられ、10万t以下に減少していると推察される。

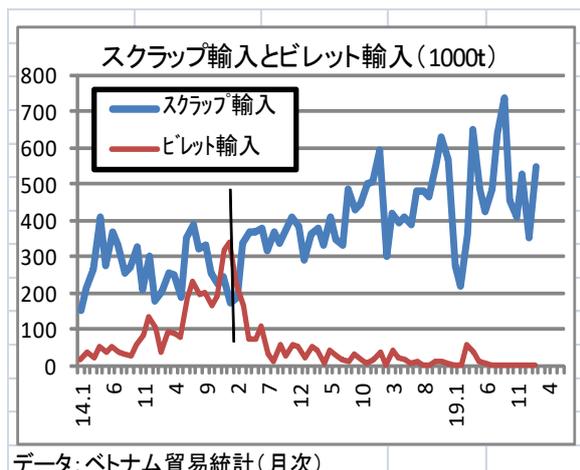
(2) 輸入ソース

約30%を占める日本が最大ソースだが、次いで香港、米国、オーストラリア、シンガポール、韓国、フィリピンなどである。EUやロシアの遠隔ソースもある。米国からはシュレッター材やNO1ヘビーくずであり、2010年当時は日本10万tに対して米国100万tの実績があった。



(3) ビレット輸入とセーフガード（SG）

2014年～17年初間、中国は内需不振で余剰となったビレットを捌き、かつ増値税還付を享受するためボロン（のちクロム）を添加したビレットを「その他の合金鋼棒鋼（スクウェアバー）」として輸出展開した。輸出量は推定2,500万t～2,600万tに及び、発展途上国主体に安価で輸出されたため、鉄スクラップ流通に影響を与えた。ベトナムにおいても国内電炉操業に影響を与え、スクラップ輸入量は減少した。政府は16年



3月ビレット輸入について既設の9%輸入関税に加えて、17年3月21日まで23.3%、以降毎年2%ずつ軽減し、20年3月22日以降は0%とするセーフガードを発令した。これによりスクラップ輸入が明確に回復する動きとなった（上図参照）。そして20年3月SG期限を迎える。今後について昨年末より検討が進んでいたが、このほどベトナム商工省は3年間延伸し、23年3月22日以降を0%とすると発表した。1年目でビレット輸入関税付加は15.3%、2年目13.3%、3年目11.3%となり以降は0%となる。同時に棒鋼、線材も継承され1年目9.4%、2年目7.9%、3年目は6.4%となる。ビレット関税は毎年2%ポイント軽減していくが、向こう3年間はほぼ現状の輸出環境が維持されることになる。

ベトナム・輸入ビレット及び棒・線セーフガード				
16年3月設定・ビレットSG		20年3月設定・ビレット		同棒・線材
開始16年3月	23.3%	21年3月21日まで	15.3%	9.4%
17年3月21日まで	23.3%	22年3月21日まで	13.3%	7.9%
18年3月21日まで	21.3%	23年3月21日まで	11.3%	6.4%
19年3月21日まで	19.3%	23年3月22日以降	0.0%	0.0%
20年3月21日まで	17.3%			
(20年3月22日以降)	0%			

3. 東南アジア地域のビレット需給

日本の鉄スクラップ輸出にとって、今後のベトナム及び東南アジア周辺国での高炉メーカーによるビレット需給の動向も無視できない。

(1) ベトナム鉄鋼業とビレット需給

ベトナムでは北中部にフォルモサ・ハティン・スチール、



中部にはホァファット・ズンクワット製鉄所の二つの高炉メーカーが新設され稼働中である。前者はホットコイル輸入代替であり、ベトナム最大の鉄鋼専用港をもつ。後者は半製品の輸入代替とホットコイル代替も加わる。いずれも棒鋼や線材の鋼材生産や国内単圧メーカーに対するビレット供給

ベトナム製鋼法別粗鋼生産					
					単位1000t、%
	転炉	電炉計	アーク電炉	誘導炉	計
2017	4,785	7,549	4,807	2,742	12,334
2018	8,929	7,502	4,299	3,203	16,431
2019					20,066
シェア17年	38.8	61.2	39.0	22.2	100.0
18年	54.3	45.7	26.2	19.5	100.0

データ：17、18年は現地情報。20年はWSA

を行い、中国、フィリピン、タイなどへ輸出も行っている。電炉主力だったが、製鋼法別シェアは18年には転炉54.3%、電炉45.7%に逆転した（現地データ）。19年の粗鋼生産量は2,000万tを超えた（WSA統計）が、うち転炉シェアはさらに増加したと推察される。また、電炉ではアーク電炉よりも誘導炉電炉が増加中である。このような鉄鋼産業の変革のなかで、アーク電炉及び誘導炉電炉の原料として19年は567万tの鉄スクラップ輸入が行われた。ビレットの供給元は既存の鉄鋼メーカーや誘導炉メーカーに、新規に高炉メーカー2社が加わり多様化してきている。仮に鉄鉱石由来の高炉メーカービレット国内販売価格が、輸入スクラップを使用して生産されるビレットコストよりも優位であれば、スクラップ輸入量に影響することになる。輸入ビレットに対してSGが継続され海外からの流入は抑えられても、国内にスクラップ供給に関する競合材料が存在する。

(2) 東南アジア地区への中国メーカー進出

中国は国内過剰設備対策から逃れて、インドネシア、マレーシア、フィリピンで高炉メーカー進出を計画し、一部はすでに稼働中である。これらは、鋼材や半製品の輸入代替を主目的としているが、周辺国への輸出懸念は払拭されない。ビレット需給は緩み、鉄源としてのスクラップ供給にも影響が予想される。

国名	高炉メーカー	備考
インドネシア	・徳信鋼鉄 2017年8月設立	中国：ステンレス大手 青山鋼鉄、徳龍鋼鉄 ネシア：モロワリ工業団地の3社出資に阪和興業10%出資。2020年3月第1高炉、5月第2高炉。 年間500万t～600万tの輸入半製品代替。
マレーシア	・盛隆冶金集団 アライアンス・スチール (AS) ・文安鋼鉄	・ビレットと異形棒鋼、H形鋼生産⇒国内メーカー稼働率28%に低下。18年稼働。 ・現状国内需要1000万t、製鋼能力2,500万tに文安1000万tが加わるため建設反対声明中。
フィリピン	・河鋼集団 ・攀華集団	年産800万tの大型高炉一貫製鉄所建設計画・ 2社の合計能力は国内需要1000万tを大きく超える。

4. まとめに代えて

短期；ベトナムにおけるビレットセーフガード延伸は、関税率は軽減していくが実施される向こう3年間は海外からのビレットは搬入し難い環境が維持される。しかし国内でのビレット供給は多様化し競争は激化しており、スクラップ輸入は予断を許さない。

中長期；セーフガードが切れる2023年以降の中長期東南アジアを考えると、中国が進出してきているインドネシア、マレーシア、フィリピン等の高炉メーカーの生産が軌道にのり、鋼材やビレット需給を緩ます方向となる。また韓国はスクラップ自給化の進展から、東南アジアに向けたスクラップ輸出展開が予想され、追って中国もこれに加わるだろう。

日本のスクラップ輸出は今でこそ、韓国1位、ベトナム2位の市場だが、これが長く確保できる保証は短期及び中長期を展望しても少ない。特に、韓国に依存度が高い北海道、北陸、中部、中四国、九州の今後は、国内にしる海外にしる難しい舵取りが要求されよう。

市場変動如何にかかわらず「品質」については、日本の競争力として確保し維持していきたい。19年4月ベトナム訪問時に指摘を受けた非鉄金属混入のほか、コンクリートガラや木片、土砂などの規定を大きく上回るダスト類混入問題は、供給者としての責任が問われる。トピックスN051 6頁で報告したが再掲した。

ダスト混入率ワースト5(2018年以降)%				
	Origin	Port	混入率	Remarks
1	日本	大阪	8.82	取引停止
2	韓国	Any Port	7.92	取引停止
3	日本	お台場	6.42	取引停止
4	日本	船橋	5.67	取引停止
5	日本	大阪	5.06	取引停止



船内にあったダスト類

調査レポート N056

ベトナム・ビレット SG は23年まで延長

発行 2020年4月22日(水)

住所 〒300-1622 茨城県北相馬郡利根町布川 253-271

発行者 (株)鉄リサイクリング・リサーチ 代表取締役 林 誠一

<http://srr.air-nifty.com/home/> e-mail s.r.r@cpost.plala.or.jp